氏名	アンジェリッチ　マリヤーナ
ヨミガナ	アンジェリッチ　マリヤーナ
学位の種類	博士（美術）
学位記番号	博美第533号
学位授与年月日	平成29年3月27日
学位論文等題目	〈論文〉　交錯するアイデンティティー 〈作品〉　オッフェリング 楽しくやろうよ　みんなのコロ、いろんな色だよ　みんなのコロ 〈演奏〉

論文等審査委員

（主査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	梅原幸雄
（論文第１副査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	佐藤　道信
（作品第１副査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	齋藤　典彦
（副査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	手塚　雄二
（副査）			()	
（副査）			()	
（副査）			()	
（副査）			()	
（副査）			()	
（副査）			()	

（論文内容の要旨）

本論文では、自身におけるアイデンティティーの「交錯」と、その実践としての作品制作について論述した。このテーマを設定した理由は、母国セルビアを離れて日本へ留学したのち、時間の経過と共に、身近な人々との間に出来ていた境界線が、次第に曖昧化していって行ったことにある。

来日当初、私と出会う人々との間には、見えない境界線が意識的、無意識的に作り上げられていた。その境界線の一つを、私は赤いラインと呼ぶ。それは決して越える事が出来ないもので、外国人としての私と、日本人との間に存在する境界線である。肌感覚での経験として、それは日本社会の中での自分自身の捉え方に、大きな影響を与えた。二つ目の境界線は、越えられるものとしての言葉の壁であり、三つ目の境界線は、柔軟性を持つ人間であれば誰でも越えられる、価値観の壁である。最後の二つの境界線を越えた事で、私の中に何か「儚さ」を伴う感情が生まれ、一つ目の境界線への捉え方をも変える事になった。私と彼らとの間の赤い境界線は、今は何処にあるのか。そもそもなぜ境界線は出来上がるのか。人が違いについて語る事は、暴力的な行為であると言ったジッドゥ・クリシュナムルティの言葉は、本当なのだろうか。

本論文は、次の３章で構成した。

第1章「ナショナルアイデンティティーの交錯」では、私個人の持つアイデンティティーの様々な側面について考察した。まず私の知る2つの国、セルビアと日本、両国の文化的アイデンティティーを同時に持つことについて検証した。オスマン帝国からの独立後（19世紀前半）のセルビア芸術の歴史と、当時の芸術家達にとってのアイデンティティーを表現する事の意味について考えた。そして、同時期の日本の国民的意識（ナショナル・アイデンティティー）と、それが岡倉天心や五浦の作家たちにとって如何なるものだったかについても検証した。また過去の事例として、中国・清王朝に仕えたイタリア人画家ジュゼッペ・カスティリオーネをとりあげ、そこでの越境とアイデンティティーの交錯について見た。そこから、

国民的意識なるものが私にとってもつ意味と役割について考察した。

第２章「文字によるアイデンティティーの交錯」では、私が自作品中に文字を取り込んできた理由と実態、文字の果たす役割について検証した。また文化的文脈を含む文字が持つ意義、たとえば漢字を使用する民族、キリル文字やラテン文字を使用する民族等、それぞれの民族が文字を介して有するアイデンティティーについて考察した。使っている地域にもよるが、キリル文字を使うだけで、消極的なアイデンティティーが生まれる事は珍しくない。その消極的な価値観については、ビジュアルアートやデザインなどの影響、自分自身のコミュニケーションの取り方と自作品の影響について論じた。そして、文字を作品中に取り入れている芸術家達と、彼らにとっての文字の意義に注目し、自作品との共通点や相違点を検証した。

第３章「自己作品」では、第１～２章を踏まえ、私のこれまでの作品と、今回の提出作品について解説した。モチーフの選択とその文化的な意義、またセルビアと日本のモチーフ、そのどちらにも属さないモチーフについて、それぞれ検証した。日本画を描いている自分と現代セルビア作家とのずれや、地域による美意識の傾向について考えた。そして最後に、日本画の材料を使うことでの、自作品における表現の変化と、岩絵具の選択、特に瑠璃色を使う意味について考察した。

（論文審査結果の要旨）

本論文は、セルビアから来日して日本画を学んだ筆者が、自身の中で次第に交錯していったセルビアと日本のアイデンティティーを、創作論として論じたものである。

バルカン半島は第1次大戦の火種となったように、地政学的にきわめて複雑な歴史をもつ。ユーゴスラビア内戦下で育った筆者が本論文で自問しているのも、対立をこえた融和へのアイデンティティーのあり方だといえる。筆者がここで自身のアイデンティティーとして論じているのは、セルビア人であること、スラヴ民族のキリル文字、そして日本の文化と美意識であり、その交錯を本論文で論じている。

第1章「ナショナルアイデンティティーの交錯」では、まずセルビア人のアイデンティティーが、コソヴォの戦い（1389年）、民族大移動として象徴化されたこと。一方日本では、逆に“島国”という条件下で自然から文化や美意識が生まれ共有されたこと。その両者を確認した上で、歴史上で東西文化を融合したカスティリオーネ（郎世寧）を例に、自身にとっても国民的意識（ナショナルアイデンティティー）とその越境・融合が重要テーマであることを確認する。第2章「文字によるアイデンティティーの交錯」では、セルビア人も属すスラヴ民族のキリル文字に、スラヴ民族としてのアイデンティティーを見出し、自身の作品中に文字文様的に用いていること。それには宗達の絵と光悦の書が融合した「鶴図下絵和歌巻」のような日本美術の表現が、大きな示唆となったことを述べる。そして第3章で、提出作品2点について解説している。

キリル文字は、筆者と筆者の作品中でとくに重要な意味をもっているが、その歴史は複雑である。筆者によれば、ヨーロッパには大きく二つの文字体系があり、西ヨーロッパではラテン文字、東ヨーロッパではキリル文字、中間のセルビアでは両者が使われているという。ただセルビアでのラテン文字は、百年ほどの歴史ながらビジネスや情報システムで主流化しつつある一方、キリル文字は公式化されながらも、ユーゴ内戦で右翼ゲリラの示威に使われたことで、大きな負のイメージを負ってしまった。そのため筆者はそうしたイデオロギーの回避に苦慮しつつ、千年の歴史をもつキリル文字に、より大きな歴史と文化のアイデンティティーを見出そうとしている。修了作品「みんなでやろうよ　みんなのコロ、いろんな色だよみんなのコロ」は、セルビアの民族舞踊「コロ」に、日本の伝統的な稲妻文様を加えた作品である。作品タイトルは一見安直だが、輪になって踊る踊りが世界中にあるように、筆者はアイデンティティーを保持した越境と交錯による融和（友和）への願いを、ここに込めたと言える。

セルビアやスラヴ民族の歴史と文化は、審査員も初めて知ることが多く、それと日本美術の交錯を論じた内容は新鮮だった。筆者のリアリティが強く反映された学位論文として、審査会の承認を得た。

（作品審査結果の要旨）

「移ろいゆく儚いもの」への親近感。作者のもつ、この親近感が、セルビア人というアイデンティティとは異なる、日本の芸術という文化的アスペクトの受容を容易にしたといえよう。そして、セルビア人としてのアイデンティティと、「移ろいゆく儚いもの」への親近感。それらの交錯が、申請者の作品の共通するテーマであり、基調となっている。

その交錯の内実とは、一つはスラブ民族のアイデンティティを視覚化したものであったはずのキリル文字の衰退への哀感と、民族衣装を着ることを“コスプレ感”として捉えざるを得ない感覚など、「移ろいゆくもの」への相反する意識・感情であり、もう一つは、セルビアの現代的絵画表現の傾向よりも日本美術、あるいは「儚いもの」に親近感を感じてしまう、表現者としての自身のアイデンティティにおける乖離であるのかもしれない。

「楽しくやろうよ　みんなのコロ、いろんな色だよ　みんなのコロ」

儚く消え去るものへの思いと自身の交錯するアイデンティティを、キリル文字や民族衣装、そして日本の文様と重ね合わせることで表現しようとしている。「コロ踊り」という民族舞踊の三人の踊り手を画面右に、イメージ化された踊り手の持つハンカチを画面左に構成している。ハンカチは長い布状に拡大、模様化され、キリル文字で記された詩や歌詞の帯と重なり合い、画面にリズムと変化を与えている。全体および人物の表現は日本画表現技法の着実な習得をよく示し、研究の集大成として十分評価できるが、多少、形式化されすぎた感もないわけではない。今後の作者のアイデンティティのさらなる揺らぎに期待したい。

「オッフェリング」

川の流れに身を任せる民族服を着た女性。流れは、セルビア人の二つの異なるアイデンティティが交錯するさまの隠喩的表現である。流れにキリル文字で書きこまれた文章は、セルビアに伝わる叙事詩と現代の歌曲の二つの歌詞であり、作品の基調となる青色も、冷静さや受容を意味すると同時に、スラブ民族のアイデンティティを示す三色、青・白・赤のうちの一つでもあるという。異なるアイデンティティの交錯に身をゆだね、流れていく作者自身の姿をモデルに仮託し、十分に習得された日本画の技法、素材により描いた佳作と評価できる。

以上のように、揺れ動くアイデンティティを、日本画表現形式の深い理解と受容によりあらわした両作品は、学位にふさわしい充実したものであると審査員全員が評価し、合格と判定した。

（総合審査結果の要旨）

申請者は国費留学生として日本画を専攻し、以来日本語会話の勉強、日本画の絵画材料の使用に関する技術の習得についても日本美術に対しても強い好奇心と旺盛な取材により短期間で画期的な進歩をした。

日本語の習得も早く、日本語での日常会話においても、絵画・日本画材料の専門的な用語においても意欲的に勉強し理解していき、出題した課題についても短時間で習得し、その年の日本画大学院美術研究科修士課程を受験し合格した。その後も古美術研究旅行に意欲的に参加し、日本美術の研究においても奈良・京都の古典絵画の鑑賞および模写等の実習をし、日本画の材料である墨・岩絵具・箔の技法についても日本人らしい感性で体得していった。人一倍の努力により2014年、大学院美術研究科博士後期課程に入学した。この時点において母国セルビアと日本の美術の相違、外国人として日本人との越えることの出来ない境界線を意識し始めることになる。

申請者は「交錯するアイデンティティー」と題した論文でセルビアと日本との絵画と文化・風土上の問題点と心のアイデンティティーについて論述している。文字によるアイデンティティーについてはセルビアにとってのキリル文字、日本における漢字、かな等の文字について、絵画の中の文字として日本

美術の絵巻、江戸時代の淋派といった絵画の中に取り入れた作品に注目し、自作品においても実験的に制作している。

申請者の提出作品「楽しくやろうよみんなのコロ、いろんな色だよみんなのコロ」(182.0×546.0cm)の色彩感は淋派である尾形光琳の水の描き方とセルビアの伝統的な踊りであるコロを融合させた作品となっている。

「オッフェリング」(172.0×217.0cm)は博士課程2年時に制作され、申請者が日本社会での価値観に馴染んでいくことを実感しながら馴染めない価値観への抵抗感についても作画の中に取り入れ、心の中での「移ろいゆく儚いもの」が感じられる作品となった。この作品は再興第101回院展に入選し、学外においても日本画としての技術が認められた。

審査会においては審査員全員が評価し合格と判定した。